

第三部 新たな指針構築に向けて

自然史系博物館について考える

神奈川県立生命の星・地球博物館名誉館長 齋藤 靖 二

はじめに

私たちは生活のなかで、集める、調べる、伝える、といった知的作業を繰り返してきている。その対象は自然界であったり、創作活動であったりするが、蓄積することで必然的に体系化・理論化がなされ、未来を創ることに貢献してきている。そして文化の担い手として、物的証拠を継承してきたのが博物館や美術館で、知識体系を継承してきたのが教育機関といえるだろう。どちらも社会的に大事であるとはいえ、だれもが世話になる教育機関にくらべて、博物館の意義が広く認知されてきたとはいいいにくい。1871（明治4）年に文部省が湯島聖堂内に観覧施設として博物館を設置し、1881（明治14）年には学校教育に資するべく東京教育博物館として機能してきたものの、1884（明治17）年には政府の緊縮政策で廃館されそうになり、1988（明治21）年の「列品淘汰の訓令」で博物館資料は実際に廃棄されたりした。博物館は、そのはじまりから恵まれていたわけではないが、市民の支援を得ているからこそ、これまで活動が続いてきたのは確かなことといえよう。

博物館界の中で、自然史系博物館は自然という時空の変遷とともに多岐にわたる対象を相手に活動してきている。その世界は茫漠・広大であって、つねに新しい事実が見出され、いまなお魅力を失わない不思議な面白い対象である。そのため自然史系博物館は終わりのない資料収集を続ける宿命を背負っているようなもので、簡単に解決できそ

うにない課題を抱えている。ここでは、その課題の幾つかについて述べてみる。

地域博物館が大事

私たちは、すべて自然から学んできた。自然から得たもの、自然から得たことを利用して生活をしてきたし、知的創作活動を行ってきた。自然を観察し、調べて記録すること、それは私たちが生きてきた証であり、その記録・成果を将来に伝えること、それは私たちの仕事のひとつである。自然は地域ごとに異なっているので、自然を構成するものや、そこで展開される現象を理解しようとすると、地域ごとに調べて記録し研究するしか方法はない。その努力で得られた成果から、おそらく自然総体を理解する一般化した法則・理論がうまれるのであろう。その意味で、地域博物館が分担して果たしている役割が、実はとても大事であることがわかるのではないか。言いかえると、博物館はある地域から離れることができず、その地域に根を下ろしているわけだが、そのことがもっとも重要であるといえる。地域での博物館活動によって集められた「もの」、記録された「現象」が、ネットワークで共有されることで自然の全体像がより明らかとなり、新たな価値を創造することに繋がっていくのであろう。どの地域博物館も、他の地域博物館ではできない仕事を分担しているわけであるから、ある地域に博物館が存在し活動していること、それ自体が大きな社会貢献である。

テーマ別の博物館でも、同じことがいえる。こうした博物館の蓄積する資産、それらを総合することによって、それはある一つの大きな博物館ができないような桁違いに大きく内容的にも充実した資産となるに違いない。この地域資産をいかにつくるか、それは国内外の地域博物館・テーマ別博物館が連携することにかかっている。いかに資産を共有して、いかに効果的に活用できるようにするか、考えなければならない課題である。そのためには実践する職員・管理者だけでなく、設置者がどこにも遠慮することなしに自立して対応することが必要である。博物館に求められるのは、自立して資産の共有を進めることであろう。

業界認定・認証の博物館

博物館がよりよき博物館であり続けるためには、自己点検と外部からの意見を聞くことが必要である。しかし、それは形式的な評価ではなく、実質的なピア・レビューであることが望ましい。そのためには、博物館界が自立して、対象となる博物館を理解できるような第三者機関を組織し、レビューにあたってもらう。博物館界が自分たちで責任をもってやることであり、その結果は職員と管理者の学習材料となるわけだが、同じ課題を設置者が理解することが大事である。いまでは評価が当たり前になっているが、大衆運動化あるいは商品化されたものが高く評価される傾向にあって、一方、評価が科学や芸術を創出したことはないことは自覚しておくべきである。経済的に陰ってきた市場原理主義のもとでは、競争原理が導入され、自己点検・説明責任・外部評価が流行することになり、評価側の都合で評価は数値化され、博物館では入館者数が重視されたりしてきた。生き残りで余裕がなく、自己保身だけが目的となって、最大の社会貢献は予算の削減となり、博物館

でも管理と規制が蔓延してマネジメントこそ大事との誤解がうまれていった。そして、指定管理者制度、市場化テスト、事業仕分けなどがあり、博物館法改正も試みられてきた。こうした他動的なことでふりまわされ、つきあわざるを得ないのは悲しいことだが、博物館は自分たちの責任で自立してどうありたいのかを考えてもよいのではないか。博物館界で自分たちのピア・レビューで認められた博物館、たとえば認定あるいは認証博物館として互いに認め合って自立した活動することを考える。もちろん完璧な博物館などないから、いろいろな努力目標をもふくんでいる気楽な認定・認証博物館でよい。それは登録博物館のように堅苦しいものではなく、互いに本音で注文をつけあう場ができることを期待したいのである。

標本資料収集が大事

自然史系博物館は、自然から標本資料を集め続けるという基本的な業務をもっている。集め続ける中で、ときには名前がまだないものもある。言語世界では、名前のないものは存在しないと同じことなので、名前がつけられてはじめて存在することが担保される。それらは名前を得て、比較参照されるべき大事な標本として博物館に永久保管される。このような発見だけでなく、ある研究分野の進展を保証する証拠としての資料や、地域の変化を記録する資料あるいは風土を代表する資料なども収集される。それらはいずれも将来の研究素材となるものであり、地域の自然史の理解に役立つだけでなく、太陽系の成立から、地球史、生命史、生物多様性にいたるまで、そのどこかの証拠であって、地球環境の変遷史をモニターする材料となるものである。また、社会的な話題で人々に感動・衝撃を与えた資料も収集される。

博物館の収集活動は館の職員、とくに学芸員・

研究員だけでできるものではない。調査研究を継続してきた館外の方々から、寄贈されることも多い。館の職員数は限られており、それに応じて専門も限られるので、対応できる収集範囲も当然のことながら限定されてしまい、分野が偏ってしまうのがふつうである。しかし、それでもかまわないので、その地域の研究に目を配っていることが大事である。その地域にどのような自然史資料があるのかを、学会活動や研究交流を通して確認しながら、将来の収集活動の対象候補として考えていけばよい。とはいえ、収集活動は専門職員の数と予算で制限されてしまうので、いつでも思うように進めることはできない。これはどの博物館でも抱えている問題である。かつて大学に自然史とか系統分類といった野外科学があり、それらを専攻する学生による資料収集がなされていたが、いまでは非効率な調査研究として敬遠される傾向にあるらしい。資料収集は博物館の職員がたまに確保した外部資金で細々と続けられているわけだが、科学研究費のあり方をみると、これからの見通しは暗い。自然史標本資料を収集し蓄積していくことを、いったいだれがどこでやれるのだろうか。高等教育での科学も教育も商品化が進んでいるので、地味で時間のかかる自然や自然史を学ぶ機会を増やすのは難しいだろう。むしろ義務教育の頃から自然の面白さや楽しさをきっかけに自然の不思議さに触れてもらうのがよいのではないか。気の遠くなるような話で、簡単に解決できそうにない問題である。おそらく教育システムを根本から考えなおす必要があるだろう。

収蔵庫が大事

収集した標本資料を、他者が利用できるように整理し、公的資産として永久保管する、これは博物館独特の仕事である。地域博物館は、その地域

の自然・風土の記録として標本資料を休むことなく集め続けるのは、それらの一つ一つに地域の物語が刻み込まれているからである。そこには自然環境の移り変わりが反映されているだけでなく、標本にして維持してきた人たちの考え・生き方もふくまれている。その生活から歴史・文化まで、未来につながる記憶がつまっているといえるだろう。とくに自然史に関わる標本資料は、大小様々、重さや形状もいろいろで、乾燥標本から液浸標本まであり、防虫・防黴対策も必要で、収蔵庫も変化に富んでいる。

自然史の標本資料は、一方的に増え続けるだけで減ることはない。おそらくどの地域博物館でも収蔵庫は満杯近くになっていて、それを拡張すること、あるいは新たに建造すること、それは博物館がつねに抱えている問題である。しかし、博物館のそばにスペースを得て工事建造予算を確保することは、とても難しいのが現実である。そのため使用されていない施設を利用することも考えられりすが、職員と標本資料が離れてしまうので、その利活用が不便になることや、そこを維持管理する要員が必要になることなどから、あまり好意的に受け取られることはない。では、どうすべきか。より古いものから廃棄処理していくのか。これは博物館として考えられない。デジタルアーカイブズにして、実物の保管をやめるのか。これも考えられない。実物でなければ、たとえばDNAも同位体比分析もできないのだから、研究素材にはならないことがわかるであろう。やはり増え続ける標本資料のために、永久に収蔵庫をつくり続けるのであろうか。このことは博物館界でもっと議論して検討しなければならない課題である。

学芸員が大事

自然史系博物館は、「在る」だけのものではない

く、標本資料を集めて継承していくことで、「成る、成っていく」ものである。そこに学芸員・研究員の大事な役割がある。とはいえ、博物館があらゆる分野の専門家を雇用できるわけではなく、むしろ専門が限られた僅かな人員の努力で仕事が進められているのがふつうである。このことが実は重要なことで、かりに学芸員の資格をもっていたとしても、ある地域博物館に必要な人材が他の地域博物館でも同様に通用するとは限らない。資格があるかないかというよりは、その博物館に必要なかつ適任であるかどうか、が大事なことであろう。その意味から、博物館界が、地域博物館で働く職員を、申請にもとづいて認定あるいは認証学芸員として評価・顕彰するのはできないであろうか。学芸員の資質を、自分たちの責任で判断しようとするもので、博物館界が第三者による信頼できる組織をつくらないといけない。博物館界が自立して、学芸員のやる気がおこるようなことを自分たちで考えるのがよいだろう。

学芸員は、通常は地域博物館の枠内で仕事をしますが、その枠をはずして、学芸員がどこの地域博物館でも働けるようにできないであろうか。つまり学芸員の共有化である。これも簡単にできることではないが、たとえば、ある地域博物館に未整理の資料があつて、その研究・整理をしたいときに、他館の専門家に出張依頼するか、または公募して他館の専門家に臨時で働いてもらう、といったことである。これも博物館界の中で情報を共有してさえいると、できないことではないのではないか。博物館界に、効率よく学芸員を手配・斡旋するような組織があつてもよい。場合によっては、期間を限定しての学芸員の交換でもかまわない。勝手に自由にはできないであろうが、設置者や管理者の理解が得られるならば、学芸員が力を発揮する機会は増えるのではないか。

おわりに

自然史系博物館をとりまく状況も変わって、現在の究極の理想的な博物館は、経費がかからず、儲かって、かつ競争教育に貢献することである。もっぱら地域貢献の掛声のもとに学童・市民へのサービスに重点がおかれる。収蔵庫や管理費が必要となるコレクションなどもたない・つくらない、人件費や研究費のかかる学芸員は最低限でよい、展示は他館からの借用・企業の協賛でやる、教育活動は大学や研究機関の人材を活用、入館者対応はボランティアにまかせる、後進の育成などとてもない、国際貢献などいまは考えない、といった雰囲気になってきている。これでは困るので、どの地域博物館も自立して、自分たちの将来を自分たちで考えていかなければならない。

参考文献

- 花井哲郎. 1996. 自然史科学の意味論 (自然史科学という言葉の意味). 化石, (60): 63 - 66.
- 斎藤靖二. 2003. 自然史系博物館で資料を集める. 博物館研究, 38 (11): 3 - 5.
- ・西田治文・真鍋 真. 2011. 公開シンポジウム「緊急集会：被災した自然史標本と博物館の復旧・復興にむけて—学術コミュニティは何をなすべきか?」を開催して, 特集1 東日本大震災への対応—学術フォーラムの成果の概要—. 学術の動向, 12: 56 - 59.
- , 2013. 自然史標本の意義について. 化石, (93), 131 - 135.
- 椎名仙卓. 1988. 日本博物館発達史. 366pp. 雄山閣, 東京.
- . 2005. 日本博物館成立史—博覧会から博物館へ. 234pp. 雄山閣, 東京.